

各業務：地域医療連携室

1. 地域医療連携室

—体制—

事務職：男性2名、女性6名

(常勤2名、非常勤2名、臨時職員4名)

看護職：女性1名(退院支援看護師長)

—業務—

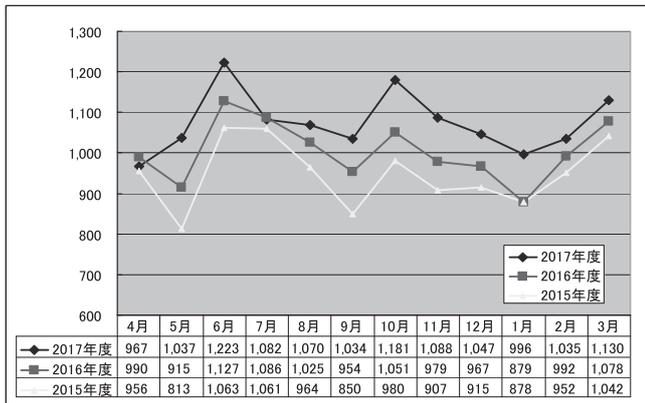
地域医療連携室は、地域の保健・医療・福祉機関などと連携をはかり、地域ぐるみの医療サービスシステムを効率よく円滑に運用していくことを目指している。

地域医療連携室は地域の中核病院として、かかりつけ医である開業医の先生方、地域の病院の先生方、福祉関連事業所の担当者さまと連携を図り、紹介・逆紹介を活発にし、良質な医療を提供し地域医療に貢献していくための対応窓口としての業務をおこなっている。

—実績—

地域医療予約件数(2017年4月～2018年3月)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
予約件数	967	1,037	1,223	1,082	1,070	1,034	1,181	1,088	1,047	996	1,035	1,130	12,890



紹介件数

※地域予約件数(月別)を年度比較した数値をグラフ化したデータ(2015年度～2017年度)

地域医療連携室を経由した紹介依頼件数は安定し、全体的には少しずつ増加傾向にある。

①紹介率・逆紹介率(2017年4月～2018年3月) (%)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
紹介率	68.3	63.7	66.8	64.7	62.0	67.6	65.7	66.7	57.4	59.1	68.0	66.8	64.7
逆紹介率	112.5	102.2	109.8	110.8	114.7	112.2	117.0	116.7	110.0	111.6	116.7	116.0	112.5

※地域医療支援病院用の算出基準にて率を算出

2017年度は紹介率が64.7%、逆紹介率が112.5%で、地域医療支援病院の要件である「紹介率が50%以上かつ逆紹介率70%以上」を十分に達成した。

②地域連携クリティカルパス導入件数(2017年4月～2018年3月)

地域医療連携室では、病診・病病連携の推進の一環として、地域連携クリティカルパスの導入に積極的に関わっている。

●がん地域連携パス

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
乳がん	4	5	8	2	2	1	1	2	1	2	3	0	31
胃がん	1	3	1	4	3	1	2	4	0	3	1	1	24
大腸がん	10	4	2	6	8	4	3	2	0	3	6	1	49
合計	15	12	11	12	13	6	6	8	1	8	10	2	104

●脳卒中地域連携パス

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
脳卒中	11	22	15	10	14	9	16	18	24	14	24	2	179

●大腿骨地域連携パス

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
大腿骨頸部骨折	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

③医療従事者対象の勉強会・研修会(事務局)

地域医療連携室では、医師会をはじめとした地域の医療従事者向けの勉強会・研修会の事務局の役割を担っている。

<りんくうカンファレンス>

隔月(奇数月)の第3木曜日に開催している。(主催は泉佐野泉南医師会)

2017年度は計6回開催された。

【詳細は院内行事のページ参照】

<クリニカルレベルアップセミナー>

毎月第4木曜日に開催している。地域の医療従事者および当院の研修医向けの内容。

2017年度は計11回開催された。

【詳細は院内行事のページ参照】

④市民健康講座の開催

<市民健康講座>

8月・12月を除く毎月第3土曜日に、当院3階大会議室において市民健康講座を開催している。

【詳細は院内行事のページ参照】

⑤その他

<りんくうメディカルネットワーク>

地域医療機関とのコミュニケーションを図ることを目的として直接顔を合わせる場を設定している。

当院診療科からの診療内容紹介と連携に関するパネルディスカッション(意見交換)を実施。

(於:スターゲイトホテル関西エアポート6階 アクアマリン)

第1回:2017年4月22日開催、第2回:2017年10月7日開催

《泉州南部診療情報連携システム(通称:なすびんネット)整備事業》

地域医療再生基金の事業として、なすびんネットの整備事業を展開している。2013年10月より試行運用を経て、2014年4月の本番稼働を開始より4年が経過した。今年度だけで2,351件の同意取得件数があった。

●なすびんネット同意取得数(2017年度)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
同意取得件数	112	491	282	181	151	147	183	170	151	151	164	168	2,351

2. 地域医療連携室(MSW)

—業務—

MSWは患者とその家族の生活や傷病の状況から生じる経済的・社会的・心理的不安や問題等の解決に必要な社会資源の情報提供や活用の助言・指導等を行い、院内の関係職種・地域の関係機関との連携を密にし、患者が安心して療養できるよう支援することを目的とした業務をおこなっている。

医療費の助成制度、生活費に関すること、転院やかかりつけ医紹介、在宅医療・介護、社会保障制度、家族関係の問題など多岐にわたる相談に応じている。

—基本方針—

- 中立的な立場から患者・家族等と関係職種・医療機関との信頼関係の構築を支援する。
- 必要に応じて関係職種、関係機関との連携を図り、相互に情報・意見交換を行い、相談援助体制を構築する。
- 患者の自律性、主体性を尊重し、患者との積極的な関わりのもと問題整理を援助し、解決方策の選択肢を提示する。
- 社会的に求められる守秘義務を遵守する。
- 最良の実践をおこなうために研修などに参加し、専門性の向上に努める。

—実績—

早期退院支援に向けた継続した取り組みとして退院支援看護師長、入退院サポートセンターなど看護局と連携し、各病棟で週2日退院支援カンファレンスを行い、入院前の生活状況、介護福祉サービスの利用の有無、退院後の生活課題等、情報を共有し、患者・家族に入院後早期に退院支援が行えるよう取り組んだ。(実績:3,357件)

また、2016年4月から認知症ケアセンターが立ち上がり、認知症ケアスタッフに専任の社会福祉士を配置した。週1回程度の回診および多職種カンファレンスを実施し、病棟スタッフと協働してケアの推奨などをおこなっている(高齢者の入院が増加傾向にあり、認知症やせん妄を発症する患者の割合も増加している。治療を受けながら日常生活を整え、せん妄予防やADLの維持・獲得に向けて活動した。)認知症に対する正しい理解のもと、適切にチームアプローチが行えるよう、認知症高齢者が安心して急性期医療を受け、地域で暮らし続けることができるよう入院時から退院後の生活を見据えた支援を行っている。

転機先の調整件数としては例年通り、転院調整が最も多く、調整件数は1,258件(前年度は1,190件)と、1月あたり約105件(入院患者のみ)の調整ということになった。また退院前におこなったカンファレンスについても前年度と比較して増加(介護連携148件から217件、共同指導35件から94件)しており、年々増加傾向にある。

周産期においては、妊婦の抱える様々な社会的な問題の支援、関係機関との連携を密におこなっており、産科医とともに「安心母と子の委員会」に参加した。2012年9月より「妊婦等について悩まれている方のための相談援助事業」が大阪府下で開始となり、妊婦期からの妊娠・出産・子育て等に係る相談体制等が整備され、当院も継続して地域の後方支援病院としての役割を担うこととなっている。

—対外活動実績—

- ①大阪府産婦人科医学会
安心母と子の委員会に定期的に出席。
・泉佐野市周産期支援部会 等
- ②南泉州地域医療介護連携協議会
5月18日、10月19日、2月15日の計3回開催。
泉州圏域における医療介護の連携体制の現状と課題をテーマにこれからの連携について、協議会を通して検討した。(於:りんくう総合医療センター)
- ③大阪緊急連携ネットワーク 地域連携担当者会議
4月18日、7月11日、10月24日、1月26日の計4回開催(主催は日本慢性期医療協会)され、3次救急病院と慢性期病床の連携について協議をおこなった。
- ④大腿骨地域連携パス会議
地域連携パス定例検討会に出席。
泉州地域における大腿骨地域連携パスの運用について協議した。
- ⑤泉州地域リハ連携会議
7月29日、11月30日、2月24日の計3回開催(事務局:府中病院)
南泉州地域におけるリハビリについての課題について急性期病院、回復期リハ病院、医療療養型病院、連携開業医と情報共有をおこない、地域連携パスの運用について協議した。

—各種調整実績と成果—

【転院調整実績】

	2016年度合計	2017年度合計
外来から他院	92	73
入院から他院	1,190	1,258

【在宅調整実績】

	2016年度合計	2017年度合計
在宅	414	377
(介護連携)	148	217
(共同指導)	35	94
施設	110	100

—今年度の成果と反省点—

退院支援において病棟と一体となつての退院支援カンファレンスが定着した。

また退院前カンファレンスの件数が増加し、退院前に各関係機関と情報連携をおこなうことが定着しつつある。

—来年度への抱負—

活動の指標としての数値実績は上がってきているので、今後はその質を求めて取り組みたい。

入退院サポートセンターと統合した患者サポートセンターを立ち上げ、病院の顔として機能できるように尽力したい。